地域博物館の面白さと難しさ

――沖縄県下の博物館の収蔵物と三州足助屋敷を中心に――

斎　藤　修　啓

はじめに――地域博物館の面白さ――
第１章　地域博物館の見学
①漁労や葬式の資料をもつ石垣市立八重山博物館
②人頭税関係の資料が収集されている喜宝院蒐集館
③地域の生活ぶりを示す名護博物館
④山の生活の営を残す三州足助屋敷
第２章　沖縄県下の地域博物館を例とした地域博物館の収集活動の課題
①急激な生活様式の変化に遅れをとっている地域資料の収集
②自然史分野が軽視されがちな沖縄県下の地域博物館
まとめ

はじめに――地域博物館の面白さ――

この小論では、展示の現状をとおして博物館の機能について考えることをテーマにしている。

筆者は充分とはいえないが、以前から身近な博物館の常設展や特別展に行き、展示物を見ること自体を楽しみ、博物館の教育的な機能にふれる機会が比較的多かった。博物館を研究対象とすることを自覚するようになってからは、意識的に見学するようにしている。しかし、見学して面白くないと感じることも多かった。そういった時には、趣味としてではなく、研究対象として見に行くから面白くないのかと理由づけをすることもあった。“博物館は楽しいところ”という思いと、物足りなさの現実に戸惑うことが少なくなかった。博物館を見学しても、２、３の資料に面白みを感じるほかはサッパリ興味がわいてこないこともあった。博物館の面白さの由来がわからなくて、漫然と見学をしていたようである。

博物館を研究対象としようとしたものの、博物館の面白さに釈然としないわだかまりを感じていた頃、沖縄県下の博物館を見学する機会を得た。沖縄は灰谷健次郎の『太陽の子』[1]に出会って以来の憧れの地である。沖縄へ行くこと自体も目的であったが、若くして亡くなられた、日本の本格的な博物館研究者であった伊藤寿朗の著した『ひらけ、博物館』[2]で紹介されている名護博物館をはじめとして、沖縄県下の博物館を見学することが第一の目的であった。

1992年7月の初旬から中旬にかけての2週間あまり、わたしは沖縄を旅行した。一人旅であったが、石垣市民会館館長の石垣博孝さんをはじめとして、宜野湾市に住む友人など、多くの人にお世話になり、博物館見学や観光を充実させることができた。沖縄本島（那覇市・宜野湾市）での観光を皮切りに、石垣島で石垣市立八重山博物館、みんさー工芸館を見学、竹富島で喜宝院蒐集館を見学、西表島を観光、本島に戻り那覇で沖縄県立博物館を見学、平和祈念公園内の沖縄県立平和祈念資料館を見学、本島北部の名護博物館と読谷村立歴史民俗資料館を見学、最後に沖縄市にある私立の諸見民芸館を見学して旅行を終えた。くわえて、活気にあふれた那覇の公営市場は沖縄の文化を知るためのよい場のひとつであったように思われる。フェスティバルとして一年に一度だけ市民に開放されるカデナ基地に入場できたことは、基地の実態の一部に触れることができたという意味で、貴重な経験であった。ただ首里城については、復元工事の真っ最中で遠回しにしか見ることができず、残念であった。

沖縄県下の博物館を見学して、非常に面白いと思った。しかし、見学している時にはその理由がよくわからなかった。名古屋に戻り、地元の博物館を見学したり、博物館について学習しているうちに、理由が少しずつわかってきた。

沖縄の博物館を見学して面白いと感じた理由は、“わたしが見て面白いと思うようなもの”が展示されていたためであった。これは単純な理由であるが、この条件を満たすことは意外に難しい。面白さを感じるか否かは、あくまで見学者側の問題であり、そのうえ博物館は入館者の希望をもとに博物館資料を収集するわけではない。

わたしが沖縄の博物館を面白いと感じることができたのは、とりもなおさず、それらの博物館に特色を見いだすことができたからにほかならない。博物館が特色をもつことは、その博物館を性格づける収蔵物に特色があることに由来する。すなわち、収蔵物に特色があり、その特色を入館者が理解することができれば、その収蔵物、ひいては博物館自体を面白いと感じることができる。換言すれば、身近な博物館の面白さを理解できなかったのは、自分自身の、博物館の役割や博物館が収蔵している品々についての、勉強不足が関連していたともいえる。

この論文は、博物館を研究対象としているわたしが、沖縄県下の博物館を見学することをひとつの契機として博物館（特に地域博物館）の面白さをいくぶんか理解しえたことにかんがみて、それら地域博物館がかもしだす面白さの背景や原因を考察しようとするものである。しかし、地域博物館が面白さを発揮するためには困難も伴う。その面白さを大きくするための資料収集において工夫すべき余地について、実例を挙げて述べる。本論の構成は、第1章において沖縄県下の博物館と、足助町にある動態保存博物館としての機能をもつ三州足助屋敷をとりあげ、わたしが面白さを感じた点についてふれる。第2章では、それら地域博物館の事例から気づいた収集活動の課題について述べる。

第１章　地域博物館の見学

以下に例として挙げる地域博物館の収蔵物のなかには、民俗学・歴史学・考古学などその背景になっている学問に詳しくないわたしにも、その収蔵物の面白さがわかる程、特色のあるものが含まれていた。博物館資料の特色は、元来、多くの博物館、多くの資料を見比べることによってはじめて理解できるものであり、限られた地域内の資料を見るだけではその地方に存在する資料の特殊性を気づくことができない。ところが、わたしの目にもわかるほど、沖縄県下の博物館が収蔵する資料や足助町の三州足助屋敷は、わたしの身近にある博物館やそこに収蔵されている資料との差異が認められた。わたしが面白さを感じた資料やその背景となる文化の一端を紹介することを中心として、博物館とそれが立地している地域の特色の概略についてもふれたい。

ちなみに、本稿では沖縄県立博物館（以下、沖縄県博と略）をとりあげない。沖縄県博は、沖縄県下で博物館資料が総合的で最も充実している館である。しかし、わたしは沖縄県博が扱っている地域よりも狭い地域の資料を収集する沖縄県下の博物館を、この論文ではとりあげる。沖縄の歴史には、江戸幕府や明などと対峙した「琉球王国」の時代がある。沖縄県博はそれに関連する歴史研究のための博物館資料や、琉球王国の歴史の中で生まれた文化を示す博物館資料についての収集については、本土の国立博物館以上に責任がある。わたしは地域博物館というときの「地域」をもっとせまい単位で見たいと思ったので、沖縄県博を一地域博物館としてとりあげなかった。

①　漁労や葬式の資料をもつ石垣市立八重山博物館

石垣島は、沖縄本島よりさらに400km 余り南西に位置する、八重山諸島の中心的な島である。この島は第二次世界大戦の直接的な被害を運よく免れることができた。しかしこのような離島でさえ、戦後の生活様式の変化の中で、食生活の在様や民具といった地域資料の破壊や流出などの人災からは免れることはできなかった。沖縄県下の博物館資料は、1609年の琉球王国への薩摩藩侵略や、1945年の沖縄戦の際の破壊や略奪によって大被害を受けた[3]。1879年の琉球処分にあたり、首里城内に保管されていた膨大な文書類が明治政府に接収されたりした[4]。第２次大戦後の現代においても沖縄の日本への復帰前に八重山の地域資料が盗掘されたり、骨董屋によって売却されたり、学者・学生などによって県外に（琉球から日本に）持ち去られたものが少なくないという。

地域資料を持ち出されることに危機を感じたのか、地域住民は資料を保存し、収蔵するための施設の建設を願うようになった。このような住民たちの意識の土壌の中で、石垣市議会の決定により、沖縄の本土復帰の特別記念事業として博物館が建設されることとなり、1972年10月石垣市立八重山博物館は開館した[5]。

この館の特徴は、沖縄という文化的に独自なものをもつ地域の民具が収蔵・展示されていることである。八重山地方は、沖縄県といっても、石垣空港から沖縄本島の那覇空港へは飛行機でも１時間程かかり、どちらかといえば台湾に近い（石垣島から台湾への距離はおよそ200km）。こうした

地理的条件に規定されて、「八重山は沖縄の文化圏の中にあって特異な文化圏を形成するとともに古くから、南方文化の受け入れ口として、独自の文化を育んできた」のだといわれている。こういう事情を考慮して八重山博物館は、沖縄文化圏の中でも「八重山文化圏に的をしぼって、点在する各離島から資料を収集して展観し、また南の表玄関としての特色ある展示を心がけている」という[6]。

八重山博物館に入ると、すぐにロビーに置かれた宮良殿内（みやらどんち）の模型に目がいく。宮良殿内は1819年に建てられたもので、市内の大川という地区に現存する。宮良当演（みやらとうえん）が宮良間切（まぎり、間切とは琉球王国独自の行政単位のこと）の頭職（かしらしょく）となったことを記念し、首里の貴族屋敷をまねてつくったという。王府時代は階級規制が厳しく、八重山の頭がこのような家屋敷を構えるのは違法だとして茅葺きに改められた。しかし廃藩置県の後に、現在の瓦葺きになったという。この建物は1972年５月15日付けで国の重要文化財に指定されている。模型は家の骨組みのみを示すもので、木で作られている。本州の太平洋岸側の住居と比較して、柱が多く、天井が低いなど、台風銀座の八重山ならではの特徴ある家屋構造を持っている[7]。

陳列室の中で目にとまったものは、漁労に関するものと、葬具類であった。

漁労に関する資料の目玉は、漁船である“サバニ”と“くり船”であろう。展示物のくり船の中には南方から漂着したといわれるものもあった。サバニやくり舟は、木という材質のためか、あるいは人々の生活の跡が染み付いているためか、実家の知多半島の漁港などで見る、同程度の大きさのグラスファイバー製の漁船よりも重厚な感じがする。くり舟など、木を刳り貫いて造るという技法に制約されていた必然性もあろうが、板を張り合わせたサバニもくり舟と同様に舟幅が狭い。サバニやくり舟の形状は、カヌーや競技用のボートのように幅が狭い。舟幅が狭いという特性のためか、舟足は速かったという。速いのはいいが、海の上での安定性はどうであるのかが疑問に思われた。

八重山博物館では“くり舟”と“サバニ”を、工法によって分けていたようである。すなわち、一本の木を刳り貫いて造ってあれば“くり舟”で、板を張り合わせてあれば“サバニ”と分けていたようである。しかし『大百科事典』[8]によれば、サバニは古くは松材でつくり、近代に入ってからは主として杉材でつくられていたが、「しだいに板舟に変わり、現在完全な刳舟は博物館でしかみられない」という。すなわちサバニはくり舟から“ハギ舟”（板舟と同様のものをさす名称。板をはぎ合わせることからこの名がついたという）へと変化したということである。くり舟から、現在のサバニの主流となっているハギ舟になった背景には、経済的な理由があった。つまり「刳舟１隻でハギ舟なら４、５隻分の船材がとれることもあって、明治以降急激に刳舟は姿を消すことになったと考えられる」[9]という。ただ、くり舟は必ずしも一本の木を刳り貫いてつくられたわけではないようである[10]。八重山博物館のくり舟が、一本の木でつくられているのか否かは確認していない。

道具類では舟の中に入った水をくみ出す“ユートゥイ”というものや、舟の上でタバコを吸うのに、水が入ってタバコがしけるのを防ぐ“海プゾー”と呼ばれるタバコ入れなど、多くの資料が漁

具と一緒に展示されていた。舟や漁具の展示から、この八重山地方の人々と海との関わりの深さをうかがうことができた。しかし、漁具の存在は博物館において確認したが、充分な記録を取っていなかったため、本稿では記述ができない。

その地域の産業のひとつとして重要な位置を占めていた漁労に関する資料を、八重山博物館が収蔵・展示していたことをこの小論を書くに際して評価するにいたったけれども、筆者は見学している時には博物館の意図をくみ取ることができず、それらの資料の充分な記録をとらなかった。そのために、ここでは漁具についてふれることができない。これは博物館を見る側としての大きな失敗であった。ただし、博物館側にも改善点がある。展示資料として、漁具に充分なスペースがとられてはいたものの、たとえば館報[11]での展示品の紹介には「漁具・サバニ・刳舟」としか書かれていない。ここからは展示品の豊かさを思い起こすことは到底できない。パンフレットや収蔵目録を充実させれば、収蔵品の価値を今以上に入館者などに伝えることができると思う。

葬具類の展示にも興味がひかれた。わたしの地元の博物館では、葬式に関する資料を収集しているか否かはとりあえずは考慮にいれないこととして、葬式に関する資料が展示されているのを見かけない。しかし八重山博物館は、この地域の葬式に関して特色があることを認識しているのか、葬式に関連した資料を収蔵・展示している。とくに積極的に収蔵しているように思われたのは、焼き物の厨子であった。

厨子とは納骨器のことである。展示されていたものについていえば、およその大きさは高さ80cm、幅・奥行きともに40cm程のものである。厨子には、もともと納骨器として作られたものと、壺や水甕などを転用したものがあるという[12]。八重山博物館に展示されている厨子は、読谷村立歴史民俗資料館館長の名嘉真宜勝さんの分類法をもとに分類してみれば、家型焼厨子や甕型焼厨子という類いのものである。すなわち、家の形をした焼き物の厨子や甕の形の焼き物の厨子などである。彩色してある厨子もあれば、素焼きの厨子もある。八重山博物館では展示されていなかったが、木製の厨子や石製の厨子もある由で、地域・時代・家の経済状態によって厨子の材質や形態は異なるようである。

これらの厨子の中には実際に先祖の遺骨が納められていたのだろう。装飾的なもの、飾り気のないもの、どれをとっても先祖に対する人々の思いが込められている。こういった厨子は、日常生活の中で信仰心を失っているわたしに、ある種の威圧感を覚えさせる。

厨子を納める墓も特徴的である。沖縄地方では本土と異なった方法で先祖を弔っており、墓の様子も違っている。八重山博物館では墓の様子は具体的に紹介されていなかったが、読谷村立歴史民俗資料館では実物大と思われる墓の模型と、厨子などの収蔵物を組み合わせた展示があり、特色のある沖縄地方の墓のひとつの例を紹介していた。わたしの身近にある博物館では、古代の墓を研究対象とし、埋葬の様子を博物館資料として展示する例はみる。しかし、墓石類を収蔵物としたり、現代の葬制についての展示をする博物館はない。

石垣島では市街地を歩いていて墓を見かけることはなかったが、沖縄本島中部の宜野湾市（の沖

縄国際大学付近）では、住宅地を少し奥に入ると、ちょっとした畑や草むらの近くに墓が建てられているのを5、6箇所見かけた。竹富島では住宅の集まっているところから500m程離れた、島の周りを巡る道の傍らに墓が建てられているのを見かけた。現代の名古屋などでは、寺院の敷地内であるとか、何々霊園といった場所に墓が集められているのが一般だが、沖縄ではどうも違うらしい。

沖縄においても現在の葬制は、都市部を中心として火葬が定着したが、従来は（およそ1950年代以前）洗骨（シンクチ）をともなう、いわゆる風葬が沖縄全土でなされていたようである。現在本土では、墓地とするための土地の確保の問題や衛生上の問題により、都市部を中心として火葬が一般的だが（条例などで葬法を定めている地区もある）、土葬が行われている地方もまだ存在するようである。しかし沖縄では現在土葬はみられない。発掘調査などにより、いくつかの例が報告されるのみという[13]。そういった意味から、土葬は沖縄に全く普及していないといえるだろう。地面に穴を掘って遺体を埋める（比較的単純な葬制である）土葬が、全く普及していないのは不思議である。

風葬とは「遺体を原野・海辺・樹上・洞穴などに置いて自然に白骨化させる葬法」であり、わたしが見かけた「亀甲墓や破風墓などの墓堂のなかでシルヒラン（遺骸を白骨化させること、筆者註）をおこなうものも、風葬の発展したもの」だという[14]。風葬では棺に入れた死者を焼くことなく、墓の中に安置しておく。そして三周忌の後に、遺骨を水で洗う洗骨をすませ、骨を厨子に納めて再び墓室内に安置するという[15]（地域によって差異がある）。風葬にともない、棺を置く場所が必要であったことや、個々の先祖の厨子の安置場の確保のためか、わたしの見た沖縄の墓は本土の一般的な墓よりも大きかった。葬式用品として、死者の棺を運ぶのに用いられた龕（ガン）なども展示されていた。

② 人頭税関係の資料が収集されている喜宝院蒐集館

喜宝院蒐集館は竹富島にある日本最南端の仏教（浄土真宗）寺院の喜宝院に併設されている。竹富島は石垣島より南西へ約5.5km、高速船でおよそ10分のところに位置する。周囲9.2kmの珊瑚でできた小さな島で、1992年5月現在の人口は251人という[16]。その内「65歳以上101人で高齢化率40パーセントと、すでに超々高齢化社会」となっている。しかし、「寝たきり老人、痴呆老人が一人もいない」のは注目される[17]。同様に、このような小さくて人口も少なく高齢化のすすんでいる島に、博物館があることも注目すべきである。

この資料館を訪ねる前に“喜宝院蒐集館”という名称を知り、格式ばった名の博物館だと思った。寺院に併設された博物館であるとは及びもつかなかった。旅行案内書などを読み返すと、寺院であることが記されているが、その時には目にはいらなかったのであろう。こういった早とちりは、沖縄の宗教のことについてわたしが無知であったことに起因する。沖縄の宗教は民間信仰のようなもので、海の神様などを祭っているのであろう、などどいった思い込みをしていた。実際、宗教のことについて詳しく調べるには至っていないけれども、竹富島には御嶽信仰（独特の琉球神道）がしっ

かり息づいているという話をうかがった。なお、この喜宝院は本土のお寺のように檀家制度をもっていないという。

離島であることが皮肉にも幸いしたのか、この竹富島には沖縄地方の昔ながらの赤瓦で葺かれた家が多く残っている。1972年の復帰前後から、この島でも県外の資本による土地の買い占め問題が起こった。しかしこれに対し、島内外の人々によって結成された「竹富島を生かす会」(72年結成、82年に「竹富島を守る会」へ改称)を中心として土地買占め阻止運動が展開され、具体的な県外資本の進出計画は凍結させられたという。その運動の中で自分たちのもつ文化に対する自覚がうまれたのであろうか、沖縄の伝統的な集落形態を守ることに意義を見いだすようになった。こういった意識のもとで、町並み保存運動のひとつの成果として「竹富島憲章」が制定された。

竹富島憲章は1986年に公民館総会(住民総会)で決議採択された。この憲章は「1.保存優先の基本理念」、「2.美しい島を守る」、「3.秩序ある島を守る」、「4.観光関連業者の心得」、「5.島を生かすために」、「6.外部資本から守るために」という6項目から構成されている。このうち、第一項目の「保存優先の基本理念」には、島を「売らない」、「壊さない」、「汚さない」、「乱さない」、「生かす」という五原則が謳われている[18]。竹富島憲章は、余暇として島へ来る観光客のことよりもまず、毎日を島で過ごす住民たちの生活を守ることを念頭につくられたのであろう。島の人々の生活を守ることは、島の美化にもつながっている。島に昔ながらの町並みや美しい自然が残されているからこそ、観光客も竹富島での滞在を満喫することが可能なのであろう。

その後1987年に竹富島は、重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、その町並み保存運動が今まで以上に公に認められることとなった。柳宗悦が「琉球の富」[19]において、50年も前に先見の明を持って賛辞を捧げた沖縄独特の本葺の瓦屋根の家並みは、竹富島にきてようやく見ることができる。竹富島の戸数はおよそ120戸で、一戸につき一軒ではないためか、124軒が保存物件として指定されているという。旅館や民家のコンクリートの建物やトタン屋根、送電線やパラボラアンテナなど、昔ながらの景観を損なうものが全く目につかない訳ではないが、珊瑚の石垣に囲まれた赤瓦の家は健在である。しかしながら、戦前には沖縄の至るところでみることができたという赤瓦の屋根を持つ建物は、沖縄本島などではポツンポツンと点在するにすぎなくなってしまった。

蒐集館に隣接する、館長である上勢頭(うえせど)芳徳さんのおじさんの家も伝統的建造物に指定されている。この家は約80年前に建てられたというが、まだまだ柱もしっかりしていた。建てられた当時は茅葺きであったが、今は赤瓦の屋根で、瓦にしてから二回葺き直したそうである。石垣島に竹富出身の大工がおり、保存物件の修復などは可能だという。しかし、瓦焼職人のことなどを調べなかったのはうかつであった。赤瓦や材木そのものについては少し伺った。赤瓦は素焼きだという。そのため、雨が降った後には気化熱として屋根の熱が奪われ、室温が下がり、天然のクーラーの役目を果たすという。材木については、現在新しいものは極力使わずに、石垣島で取り壊される家の柱からまだ使用できる丈夫なものを充てるという。古い家の柱で駄目になったのものは、白蟻による被害が一番多いそうで、この被害にあわなかったいい木を再び使うという。

赤瓦の屋根を持つ建物は、犬山市にある“野外民族博物館　リトルワールド”において、“沖縄県　石垣島の家”として見ることができる。このリトルワールドでは、屋内展示場に様々な民族の生活道具などが展示されているばかりでなく、世界各地の家屋の移築復元が行われており、観覧することができる。リトルワールドにある石垣島の家は、約120年前に琉球王国時代に建てられた家が移築されたものである。家屋復元には大きく分けて、現地の家屋を分解して移築する方法と、現地から材を入れ、大工を招いて現地の家屋の形をなぞって、復元する方法とがある[20]。石垣島の家に関しては前者の方法がとられた。しかし移築の際、赤瓦は現地のものは使われなかった。リトルワールドのある犬山市は、冬にマイナス6度まで気温が下がることもあり、赤瓦の中に染み込む水分が露結してしまうという。そのために赤瓦はこの気候に何年も耐えられないであろうという判断が下され、復元瓦を使うことになった。瓦の赤色を出すのに苦労したが、試行錯誤のうえ、何とか納得のいく赤瓦ができたという。

喜宝院蒐集館は、竹富島で実際に使われた生活関連の資料を中心にして成り立っている。初代であり先代の故上勢頭亨住職が収集した資料がもととなっている。幼いころから物を集めるのが好きで、それ以来天寿を全うされるまでの60年間収集を続けられたという。また、ものを収集するばかりでなく、民話や芸能等、無形のものも数多く伝承したそうである。その集大成として『竹富島誌』[21]を著したという[22]。特に1957年に喜宝院を開山してからは、島の人たちは喜んで不要となった物などをその人柄に託して寄贈したという（1947年に竹富島布教所が設立され、1957年に喜宝院の寺称を受けて独立寺院となった）[23]。喜宝院蒐集館は1963年に開館した。

現在の蒐集館の館長である上勢頭さんは、館自体の充実を図るだけに止まっていない。竹富島全体のイメージアップを図るための竹富島町並み保存委員会の事務局を館において、その活動もしている。

館長さんは喜宝院蒐集館の資料収集方針について、「格別に系統立っていない」といわれた。しかし展示物をみると、蒐集館では“その地域の生活用具を集める”ことが基本とされているように思われた。展示室は3室あり、1室は人頭税関係のもの・古貨・焼き物が中心、1室は生活用具中心、1室は染織・芸能関係中心という構成になっていた。

収蔵物で興味深かったものは、人頭税関係の資料であった。上勢頭さんがそれらの展示品に関して、観覧者にわかりやすく説明して下さったので、特に強く印象に残っている。人頭税関係のものは、上勢頭さんに言わせても館の主要な収蔵品らしく、上納秤・拷問道具・藁算・象形文字・古文書等の原資料を展示している[24]。

藁算は結縄・縄文字ともいわれ、琉球王朝時代に文字のない庶民の生活で使われたものである。愚民政策のために文字を使うことができなかった人々が、税に関する事柄、人の数、贈り物の種類や数等を記録するのに用いたものだという。例えばあるひとつの藁算によって、4種類の情報が得られる。まず、その地区の家の配置が、藁の丸められた道の印によって表現される。第二に各家に何人住んでいるかがわかる。第三にその地区の家の戸数がわかる。第四にその地区の人員の合計が

わかる、という具合である。説明によれば、一部の島の古老により、昭和10年頃まで用いられたという。

象形文字である象形字（かいだーじ）の家紋（やばん）も興味深い。家紋は旧藩時代に竹富村の番所において使用されたものである。これは本土などにおいて一般に用いられる家紋（かもん）と同じような役割を果たしたものであろうが、家紋（かもん）が現在では印の意味するものとその家の職業や境遇との関係が不確かであるのに比べ、竹富の家紋は家の職業などと大きく関係していた。例えば、今の地図などでお寺の記号となっている、卍（マンジ）のような家紋は“糸繰”を表し、その家が織物と関係があることを示している。差金と鉋を示し、その家が大工であることを表しているものもある。新家を分家した場合は、本家からみたその方向によって、前（“マエ”といい、南に建てられた場合)、東（“アガル”、東)、入（“イル”、西)、上（“ウエ”、北）という言葉を分家の呼び名につけ、家紋にも何らかの印を加えたという。“マエ”という呼称は、一般に竹富の家が南側を正面にして建てられていたことにもとづく。“アガル”“イル”は太陽の出入りの方角に由来している。“ウエ”は現在の日本の地図が原則として北を上とするのと同様に、竹富でも北は上を表すためにこう呼ばれる。たとえば、館長さんの名字の上勢頭の「上」は、上勢頭家が勢頭家（本家）の北方に分家されたことを示している。ちなみに、石垣島などでは南の“マエ”に対応して北は“ウシロ”と言うそうだが、後生（グショウ、すなわち“あの世”）を連想させるためか、竹富では“ウエ”と表現するようである。

人頭税関係の資料と同じ部屋にあった古貨にも特色があった。これについても上勢頭さんは説明をしてくださった。沖縄の通貨の歴史をたどることにより、生活の一部が浮かびあがってきた。明治以前の貨幣もコレクションとして重要だが、敗戦後に沖縄で流通した貨幣のコレクションが興味深かった。アメリカ軍の発行したＢ円（円表示Ｂ型軍票）や、アメリカドルがこの竹富島などで使用されていた場面は今となっては想像しがたい。島でみかけたお年寄りなどが、横文字ばかりの印刷されているドル紙幣を使っていたなどということは、全く想像できない。そういう意味から、この古貨のコレクションはわたしにとって非常に面白かった。

軍票というものをこの蒐集館ではじめて知った。名古屋市にある東海銀行貨幣資料館を見学すると、日本軍によってもその占領地域で軍票が発行されていたことがわかる。同館には日本の軍票の第一号である「西郷札」(1877年発行)、日露戦争の時の軍票、太平洋戦争の時の軍票などが展示されている。ただし、この貨幣資料館では、アメリカ軍の発行したＢ円を見ることはできない。この資料館は、主に「日本で発行された貨幣」を展示するという方針を持っていることから、Ｂ円は収集はされているものの展示されていない。なお、「外国のコイン」は展示方針に含まれており、陳列台に並べられている。

③　地域の生活ぶりを示す名護博物館

沖縄本島北部は“やんばる”と呼ばれており、名護はその中心地である。名護博物館のある市街

地は市役所や市民会館・21世紀の森体育館・21世紀の森室内運動場などの施設も整い、沖縄本島北部では特に開けた街である。

名護市にはセメント・製糖・ビールなどの工場もあるという。セメント・製糖の工場の様子は残念ながら確認できなかったが、ビール工場は名護博物館の近くに立地しており確認できた。このビール工場はオリオンビール株式会社のものである。オリオンビール株式会社は、1957年に沖縄ビール株式会社として設立され、1959年の製品発売と同時に社名を現在のものに変更した。名護市にビール工場が建てられたのは、ビールの醸造に適した水を得ることができるためであるという。オリオンビールは現在沖縄県下のビール市場の約80%を占めており、ここ10年はその市場占有率に目立った変化はないという[25]。このシェアの高さは、地元品を愛用するといった意識が少なからず影響していると思われるが、ビールという長距離輸送によって風味や鮮度が落ちてしまう製品そのものの性質や、気候風土にあわせた味わいを求めた企業の経営方針も見逃せない要素であろう[26]。

市街地は名護湾に面しており、漁港をもっている。昔この漁港では、クジラやイルカ・カツオの漁獲があったという。わたしは地元の市場で行われている“せり”を見たことはなかったが、この漁港においてせりを見学することができた。せりというと朝の早くに行われているという感があるけれども、ここでは朝の10時頃にせりをやっていた。クジラが水揚げされていないのは当然としても、扱っていた魚介類の量が予想より少なかった。かわりに、見慣れない魚を多く見ることができた。しかし残念ながら、この見慣れない魚を名護博物館では扱っていなかった。第2章でも述べるが、見慣れているものに博物館資料としての価値を見いだすことの難しさを示す一例であろう。

名護博物館の初代館長だった島袋（しまぶくろ）正敏さん（訪ねた時は名護市教育委員会の社会教育課長であった）に、名護博物館の開館までのことやそれ以後のこと、名護のことなど貴重なお話をうかがうことができた。博物館についての確固たる考えや、沖縄の食文化の話は興味深かった。

沖縄の食文化、特に食肉文化の話は“食”に対するわたしの考えを開眼させるものであった。沖縄に訪れて“アシティビチ”（豚の足が煮込んであるもの。見た目ほど油こくない）や“ゴーヤージュース”（苦瓜のジュース。苦くて50ccくらいしか飲めなかった）などに挑戦してみたが、その時はただ珍しさに喜んでいるだけだった。しかし、魚や山羊を食べ、地元の工場でつくられたオリオンビールや泡盛を飲みながら“食”について島袋さんにお話をうかがうと、沖縄の文化の一面が見えてくるようであった。

島袋さんのお話や、その著作『沖縄の豚と山羊――生活の中から――』[27]によれば、沖縄では“共食”という食事の形態がまだ残っているという。祭祀の日に牛を屠殺してそれをみんなで食べたり、祝い事などで山羊を屠り、親戚・友人・知人が集って食べる、などということが行われるという。たとえば『プーミチャーウガーミ　屋部のウシヤキ』[28]では、名護市の屋部における祭祀での牛の屠殺と、その後の共食の模様が写真で紹介されている。名護博物館が開館した時や、開館何周年の記念という時などにも、牛や山羊や豚をつぶして食事会（共食）をした。博物館開館に携わった人などが集まり、食べて飲んで騒いだという。その際、食べる肉を得るために、島袋さんも当然のご

とく家畜をつぶすのに手を貸した。

普段肉を食べながらも、家畜を屠殺するのは残酷なことだとわたしは考えがちであった。そう告白するわたしにに対して島袋さんは、肉を食べる人とつぶす人との分離の進展によってひきおこされる、屠殺者への偏見などの弊害や、本土の食文化の在り方の異常さを、自分の体験をふまえながら指摘した。

島袋さんは名護博物館の開館にも尽力された方で、そのことについても多くをうかがった（名護博物館の開館までの記録は『ぶりでぃ　名護博物館1984』[29] に詳しい。ぶりでぃとは沖縄の方言で「多くの人びとの手で何かを成すこと」[30] をいう）。個人的には中学１年生の時から壷類などの収集をはじめたそうだが、1971年から社会教育課で資料の収集をはじめたという。本土への復帰や名護市の北西に隣接する本部町での沖縄国際海洋博覧会の開催（1975年7月から６カ月間）という状況の中で大規模な地域開発がすすめられ、有形・無形の資料が変えられてしまったり、失ってしまったりするのではないかという危機感がわいたそうである。博物館建設のスケジュールが無いにもかかわらず、民俗資料の収集を続けたという。

「生活というのは（様々なものが）トータル（された状態）としてある。民俗資料はひとつのものとしてだけでなく、環境などのトータルの中で見なければならない」（カッコ内筆者加筆）と島袋さんは言ったが、こういった視点により博物館の展示はできていったという。本土で60館、県内では全ての博物館を見た島袋さんの感想は、「ものの展示が多く、それを見せるだけで、環境や背景を見せていない」ということだった。また、多くの教育委員会が博物館展示の設計を大手の展示会社に発注する例が多く、全国の博物館が画一化されているように感じたという。

名護では博物館を自分たちでつくるため、多くの市民が資料収集・作成、博物館の展示場づくりに参加した。博物館づくりへの参加者たちは学習活動をしながら、民俗資料を提供してもらったり、土着の家畜である島豚（あーぐ）の剥製をつくるために皮剥ぎをしたり（剥製標本の作成は業者に発注した）、クジラやイルカなどの骨格標本をつくるための解体作業などをした。子どもたちも、できる範囲で展示場づくりに参加したという。

博物館の様子を概観してみる。

名護博物館の間取りは開放的な印象を与える。建物はコンクリート製の旧市庁舎を改修したもので、それほど広くない（敷地面積1713㎡、床面積1059㎡）[31]。受付の雰囲気や展示室の展示方法が、開放的な印象を与えるのだろう。事務所の中はまる見えで、市民と職員がお互いに気楽に声がかけられるようになっている。受付は一階ホールに面しており、そのホールは二階まで吹き抜けである。

一階の常設展示室は一室からなっている。小学校の教室を３部屋連ねたほどの広さの展示室には、名護地方で使われていた道具やら、生活用品、衣類などであふれていた。名護博物館のテーマである「名護、やんばるの生活と自然」が活かされている。ここには「生活はバザール的な空間だ」という島袋さんの生活に対する思想、すなわち人の生活は雑多なものが寄り集まる市のように、様々な場面の混在によって成り立っているといった考えが、博物館の展示方法にも滲みでている。

展示物と観覧者の間を遮るものはなく、資料を直接手で触れることができる。資料が壊されたり持っていかれたりするのを恐れずに、観覧者に触ったりいじったりしてもらっているということである。資料の保存上からは、問題が全く何も無いとは言えないだろうが、ガラス越しにでしか展示物と接することができないことが多い現状からいえば、この試みは魅力的である（喜宝院蒐集館でも資料を手で触るのは可能であった）。

一階の常設展示室は田・畑・庭・大工・食・衣・加工・家畜と、二階の常設展示室はジュゴン・浜・リーフ（ヒシ、環礁）・考古・薬草・植物・昆虫・タンクブニ（タンク舟）という具合に、小テーマごとに資料の展示がしてある。展示物で印象に残ったのは剥製である。剥製は展示されている数も多かった。島豚や山羊・にわとり・ジュゴンなどの剥製が資料の一部として重要な役割をしている。これら剥製の種類や数の多さは、人々の生活の中に家畜や獲物が入り込んでいたことを示しているようであった。

常設展示として大きく取りあげられているわけではなかったが、“田”についての展示を面白いと思った。沖縄にも田圃がある。これは稲作が大陸から伝播したものであり、日本では稲作が南の地域から広まっていったことや、東南アジアは世界有数の米作地帯であることを考慮すれば、何ら不思議ではない。喜宝院蒐集館において人頭税関係の資料が展示されていたが、琉球王国時代の宮古や八重山の人々は税として米などを納めていたという。しかし、そういった事実を知っていても、わたしには沖縄で稲作をしている光景が目に浮かんでこない。浮かんでくるのは、サトウキビ畑やパイナップル畑である。雑誌の沖縄紹介記事などをみると、農業に関して載せられている写真は大抵サトウキビ畑かパイナップル畑である。社会科の地理の教科書さえ、パイナップル畑で働く人の写真が使用されていたと記憶している。沖縄の人が稲作をしている写真を見た覚えがない。しかし同時に、サトウキビやパイナップルに関する展示も博物館において見た覚えがない。1908年に沖縄にはじめて砂糖の工場が設立されたが、サトウキビが伝わったのはかなり早く、1453年には砂糖が製造されたという記録もある[32]。「サトウキビ・モノカルチャー」という言葉が存在するように、沖縄の農業は1965年頃から「サトウキビの単作化をはじめとして、全体的に単一経営の方向に大きく変貌した」[33] けれども、そういった状況を知らせる博物館資料の展示は見当たらなかった。

沖縄本島でも石垣島でも、わたしが見かけたのはサトウキビ畑であった。石垣島も稲作が盛んであるというが、市街地の北東にある空港から街の中心までの道路沿いで、わたしが見たのはサトウキビ畑であった。八重山博物館の学芸員さんの話によると、石垣島の東の方の道路沿いでは米作は少ないが、山の方に行くと田圃ばかりだという。ちなみに稲刈りの後、田圃において稲を天日で干すということを一般にしないため、本土でみられるような風景を見ることはできないという。

西表島に行く機会を得たので自転車で島を巡ると、沖縄で初めて稲を見た。7月の半ばであったが、稲刈りをしている。人が乗って操縦するタイプのコンバインで稲刈りをしていた。その光景には不思議なことに違和感を覚えた。西表島でもサトウキビ畑が広がっていた。

稲は暖かい地方が原産である。しかし、寒冷地でも稲が育つように、品種改良が行われ、日本に

おける稲作地帯は北へ北へと広まっていった。そのかいあってか、今となっては東北地方などが南国よりも米所であるといった印象を与える程になっている。先にあげた地理の教科書についても、東北地方の紹介では必ずといっていい程稲作の写真や水田干拓地の写真が用いられている。

名護博物館の“田”に関する展示を、地元の人たちはどういった目で見るのかわからないが、わたしは以上のことを考えながら、興味深く見学することができた。

名護博物館では収蔵庫も見せていただくことができた。島袋さんはこの収蔵庫をつくるために、関東・関西といった本土の博物館はもちろん、インドやマレーシアの博物館にも見学に行ったという。ランニングコストの問題から、空調設備なしで資料を保存できはしないかと考えたからである。最も参考になったのはジャカルタのナショナルミュージアムであり、オランダ統治時代の資料が空調設備なしで70年間保存されていたことに驚いたという。収蔵庫の工夫は、沖縄の高倉の原理を利用し、下側に風を通すことで湿気を取る。壁に徹底して断熱の材料を用いる。建物のコンクリートと板壁の間に約20㎝の空間をもうけてある。棚の材料に気を配る、という点にある。ただし、現在は補助として除湿機が設置されている。

ホルマリンの臭い漂う自然史系の収蔵庫には剥製や骨格標本が収められていた。自然史系の収蔵品は予想以上に豊富である。人文系では、厨子が印象的であった。水牛に引っ張らせたと思われる耕運機や、脱穀機などの農機具もある。足踏みミシンなどごく最近まで使われていた家財品も収蔵されていた。

④　山の生活の営を残す三州足助屋敷

観光的要素をもち、同時に動態保存博物館としての機能を果たす「三州足助屋敷」という施設のある足助町は、愛知県の北東部に位置する。名古屋と長野県飯田市を結ぶ飯田街道と岡崎に至る足助街道の分岐点にあたり、近代から交通の要地であり、重要な宿場町であった。ちなみに飯田街道は明治以降の名で、江戸時代は伊奈街道または中馬街道と呼ばれた。この街道は、三河湾でとれた塩を信州へ運ぶのに使われたために“塩の道”とも呼ばれた[34]。そのため、信州では三河湾の塩を足助塩と呼んだという[35]。

また足助町の観光資源のひとつとして古い町並みがとりあげられている[36]。塩の道に沿って古い町並みが残っているという。実際に道を歩いてみると、町並み保存の着手の遅さが感じられた。道の狭さや、ところどころの建物が往時を偲ばせるけれど、昔ながらの風景が息づいているようには感じられなかった。

町並み保存といえば、足助と同じく宿場町であった、長野県の馬籠や妻籠が有名である。わたしは馬籠には行ったことがある。この馬籠は町並み保存がうまくされていた。昔の宿場町よろしく、多くの観光客でにぎわっていた。馬籠と足助の町並みの保存状態の違いは、足助の方が保存運動にとりくんだのが決定的に遅かった点に由来するのであろう（「足助の町並みを守る会」は1975年に設立されている）。博物館資料は失われる前に収集されなければならないのと同様に、町並みも失

われる前に保存せねばならない。現実には、失われる前に資料の価値に気づいたり、町並み保存にとりくむのは難しい。

足助町は自動車産業で有名な豊田市の東に接している。しかし町の大部分は三河高原にある林業集落である。東海地方随一とも言われる紅葉の名所の香嵐渓を中心にして愛知高原国定公園に指定されている。

三州足助屋敷（以下、“足助屋敷”と略す）は1980（昭和55）年4月27日に開館した。

豊田市に接するということもあり、高度経済成長の中で、人手は都市に流れた。「転出者は相次ぎ、昭和30年に1万7千人だった人口が、45年には1万2千人と減少。この年、足助町は過疎地域対策緊急措置法に基づき、過疎地域に指定された」という[37]。

過疎という状況の中で、「都市近郊山村として、独自のライフスタイルを築き上げる必要性が認識されてきた」という[38]。後に足助屋敷の初代館長を務めることとなった小沢庄一氏は「足助町が培ってきた歴史や文化」を活かす足助屋敷の構想を1973年に発案した。博物館建設のブームの中で「足助町も、散逸している民具の収集と保存を目的に、町議会や役場職員らが既設の資料館の研修を始めた」という。しかし見学した資料館の「ケースに飾られた民具からは、暮らしのロマンを感じることができなかった」。作業の実演をしているところもあったけれど、「他の展示物と同じように、『見せられている』にすぎなかった」。これらの前例を越えた資料館の姿が考えられていった[39]。

足助屋敷の現在の姿を概観してみる。

この博物館は博物館法にいう博物館や博物館相当施設ではない。国からの足助屋敷建設への予算の補助の名目をみても、文化事業として与えられているのではない。実は「農林水産省の山村振興法に基づく第2期山村地域特別対策事業」[40]として補助がなされている。わら細工・機織り・桶屋・漆塗り・傘屋・下駄屋・紙漉き・炭焼き・鍛冶屋・篭屋・木地屋といった昔ながらの作業を動態保存の博物館として見せることが、お年寄りの仕事場を確保することにつながり、補助の対象になったという。

足助屋敷は作業をする人の様子と作業をする人を取り巻く道具類がつくりだす、生活空間に入場者がふれるための施設である。生活用品や作業に用いる道具類は、博物館資料としての価値を持っているが、それを個別に見せることは主たる目的ではない。道具類が人に用いられている有様を見ることを可能としている点が足助屋敷の特徴である。くわえてその作業が生活場面から孤立したものではなく、疑似的ではあるが、あたかも作業をしている人々がここで共同生活をしているかのように、生活に根付いたものとなっている。それはたとえば、母屋で働く人たちが、屋敷内で働く人たちの昼食をつくっていることに現れている。母屋の土間になった勝手にはクドがあり、近くの棚にはガラス容器に入れられた梅干し・タケノコ・雑穀などが保存されている。居間には囲炉裏があり、薪が燃えている。ここで料理する際に使用する味噌も屋敷で仕込むのだという。

受付には「ここの手仕事は民芸でも伝統工芸でもない　自分の生活に必要のものは自分で作るしたたかな山の生活がが甦っただけなのだ　働く人に声をかけ　人の心に道具にふれてみて下さい」

と書かれた紙が貼ってある。この文と同様のことはパンフレットにも書かれている。足助屋敷が入場者に最も訴えたいことなのであろう。足助屋敷の意図に対応して、入館者にとっては“山の生活”の実践を生で見ることができる点がこの足助屋敷の特色、すなわち面白さになっている。

屋敷内では、「写真撮影は自由ですが　人物の場合には許しを得てください」とされている。この方針は、屋敷内で働く人は単なる見世物ではないこと、作業をする人と話があえば写真を撮ってもよいという柔軟性を示している。

屋敷内は看板などの説明はほとんどなく、わからないことは自分で聞くようになっている。ノルマがあるわけでもないので、作業をする人は気軽に手を休めて質問に答えてくれる。この質問のことにしてみても、写真のことに関してみても、屋敷内で作業をしている人と入場者のかかわりあいが重視されていることがうかがわれる。

作業者について触れておくと、屋敷内で昔ながらの作業に従事している人のほとんどは、60歳を越えた方々である（事務職員や直売所などの職員は除く）。わたしが訪れた時に見た限りでは、機織りと紙漉きの作業をなさっていた人以外は、いわゆる高齢者であった。例えば、『三州足助屋敷の10年』の資料の職員名簿によれば、炭焼きの初代従事者は1903年生まれで[41]、76歳のときに足助屋敷で作業をし始めている。その後は同資料の新聞の切り抜きによれば、1990年に隠居したという[42]。

屋敷内は一応見学順路が定まっており、母屋を第一に見学する。母屋は茅葺きの屋根でできている。母屋をはじめ、屋敷内の建物はあえて新築された。これらの設計は、「木造で中庭をもつ明治期の庄屋屋敷のプラン」をもとにされたようだ。母屋の軒下には、くわや千歯こきなどの農具やミノやカサ、番傘などが資料として置かれていた。柚餅子（ゆべし）も軒につるされていた。柚餅子は味噌にいろいろなものを混ぜ、蒸して干すことによってできあがる。柚餅子に混ぜるものは、地方や家庭によって違うらしい。ここでは、ゴマ・クルミ・砂糖・鰹節ケヅリ・落花生が混ぜられているという。柚餅子はスライスして、お酒のおつまみやお茶受けにするのだという。

母屋には神棚もあれば仏壇もある。囲炉裏の近くで藁細工をしている。わたしが見た時にはわらじを編んでいた。別の部屋では機織りもされている。機織りをしている人に尋ねたところ、ここで使われている織機（いわゆるたかばた）は120あるいは130年程前に作られたものであるという。補修や部分的な材質の改良などはされているが、今なお機織りの役目を果たしている。わたしは、目の前で百年以上昔につくられた機械が人に操られているのを見て、不思議な気がした。現代の人が、百年以上昔の人と同じ動作を繰り返している。そして百年以上使われている機械がここにある。実際に機械が人によって動かされているからこそ、人と道具との関わりあいについて考えることができるのであろう。また、糸繰りの実演をしていただいた時には、足助屋敷の動態保存の博物館としての面白さを痛感した。糸繰り車は博物館において、産業に関連した資料としてかなり広く収集されている。しかし糸繰り車を見るだけでは、その道具を用いて糸がつくられる様子はわからない。糸繰り車の使用を実演していただいて、はじめて納得がいった。その仕組みまでは充分理解するに

は至らなかったが、綿状のものから糸がつくりだされるところを見ただけでも収穫であった。

母屋の縁の下には、矮鶏（チャボ）と烏骨鶏（ウコッケイ）が飼われている。夜間はそこに入れられているのだろうが、昼間は全くの放し飼いである。また土蔵のまわりの細い水路には鯉が泳ぎ、牛も小屋で飼われている。

土蔵の中では桶屋と漆塗り、傘屋、下駄屋の作業所がある。わたしが見学したときは漆塗りと下駄屋は休みだった。桶屋の作業所近くには養蚕の道具がある。『三州足助屋敷の10年』[43]によれば、土蔵で実際に蚕を飼うようである。

三椏（みつまた）の栽培されている横を通り、紙漉き小屋へ行く。三椏はその名のとおり、全ての枝が三つに分かれている。この小屋で漉かれる和紙はほとんど楮（こうぞ）が原材料である。三椏は問屋から充分手に入らないからだという。三椏という植物を知ってもらうために、植えられているという。桑や竹・麻・杉皮などでも紙が漉けるということを示すための、試作の和紙が小屋の中に展示されていた。

この足助で漉かれた紙は「三河森下紙」と呼ばれる。「この紙は、優雅な和紙というよりも、むしろ泥臭い和紙で、素朴なもの」であり、丈夫なので「番傘や障子紙、フスマの下張りなどに使われてい」る。冬場の紙漉きはつめたく、大変厳しい作業で、「紙屋地獄」と呼ばれる程であったという[44]。

紙漉き小屋には水車小屋が付設されている。この水車は紙漉きと関連があるのだろうか。用途については触れられていなかった。普通の穀物をつくものと構造は同じようであった。昔は水車をつくる水車大工がいたらしい。水車大工が、水量と落差を勘案して水車の大きさを決めた道具が展示してあった。正月を迎えて間もなかったためか、水車に餅とミカンが供えてあった。

炭焼き小屋は作業をしていなかった。前回足助屋敷を訪れたときにうかがった話だが、ここの炭はかなり人気があるという。いわゆるグルメブームで、町中でも鰻屋や焼鳥屋などで、炭火を使っていることを謳い文句にしている店が目につく。そういったところに買われていくのであろう。

鍛冶屋は洋風のサバイバルナイフらしきものをヤスリで成型していた。刃渡りの長い包丁や短い包丁、刃の幅の広い包丁や狭い包丁など、多種類の包丁が並べられていた。鎌などもある。昔は農閑期には農具の修理で鍛冶屋は忙しかったという。現在は鍬などは製作しないが、補修の依頼には応ずるという。この近くでは良質の砥石が採れるらしく、天然砥石である「三河白砥石」が売られていた。また足助の町には、かつては日本刀を作る刀鍛冶もいたという。

竹細工をしている篭屋は民家が移築されたものである。軒先で竹垣を作っているのを眺めていると、茅葺きの屋根から水滴がポタポタと落ちてくる。冬場は霜による水滴が、毎日落ちるのだという。ただこのあたりは降雪はそれほどなく、名古屋と変らないそうである。しかし4㎞も奥に入ると雪は大分降る、と篭屋の職人さんが話してくれた。

篭屋の職人さんによれば、竹細工の美しさは節にあるから、竹を並べる時に節の位置が合わないようにするのが大事だという。作業を見ていて、竹のささくれなどが手にささらないか心配であっ

たが、扱い慣れているから大丈夫だという。また職人さんは左利きのようであり、その点について「左利き用の道具を使っているのか」と尋ねたところ、「右利きの道具で、最初は勝手が悪くても、使い慣れてその方がよくなる」のだという。使っている道具についても、「ここがもっとそれとったら（それていたら）などと思っておっても、その道具を使っているとだんだん手の方が慣れてくる」という。

木地屋では、お椀やお盆などをつくっている。小屋の中には乾燥棚があり、これからお盆などになるであろう木が積まれている。材料となる木は、ケヤキ・トチ・モミ、そして桜のほぼ四種類であるという。稀に、他の種類の材木を持ち込んで製作を依頼する人がいるという。木地屋の小屋には、鍛冶をする部屋が付設されている。自分で使う道具は自分で鍛え直すという。他の人が鍛えたものは、危なくて使えないそうである。篭屋は道具の刃物はそれ程切れ味のいいものは必要無いといっていたが、木地屋の仕事にとっては刃物の具合は重要なのであろう。

ところで、先程の鍛冶屋の店先では左利き用の小刀が売られていた。くわえて木地屋は自分の道具は自分で鍛え直すという。これらから考えると、左利きの篭屋が左利きの道具を使用していなかったことは疑問である。「慣れてくる」という言葉にその時は納得してしまったが、よくよく考えれば、左利き用の道具を使えば右利き用のものよりも慣れやすいことは想像に難くない。このことを思い出すと、若造が知恵者の話術で煙りに巻かれたような気分になる。こういったやりとりも足助屋敷の面白さのひとつなのであろう。

第2章　沖縄県下の地域博物館を例とした地域博物館の収集活動の課題

前章では、実際に4つの地域博物館を概観した。わたしの力不足ということもあり、それぞれの博物館の状況を充分に伝えられないのは残念である。しかし、文章による説明だけでなく、実物を見ることによってこそはじめて理解できることもある。博物館が必要とされる理由のひとつはここにある。

繰り返すが、博物館に特色があるということは、直接には特色のある収蔵物をもっていることに由来する。なぜなら、博物館の性格は、その収蔵物によってよくあらわされるから。つまり、特色のある収集活動を行うことにより、その博物館は特色ある博物館となる。沖縄県下の地域博物館は、人々が集まることによって元来持ち合わせていた地域的特色が失われてしまった場所、いわゆる中央から離れた土地に位置するために、地域的な特色が色濃く残った資料を収蔵できた。そのために、館に特色ができあがったという見方ができる。沖縄県下の地域博物館が、地理的・歴史的・文化的に国内の他の地域と比較して特殊性の強い地域にあるために、特色のある博物館資料に恵まれているのは事実であろう。しかし、地域の特色ある資料に恵まれていることと、学芸員がそれらの資料を系統的に博物館に収集することは全く別であり、この点から沖縄県下の博物館がある程度特色を持ち得ていることは評価できる。ただし、わたしが先にとりあげた沖縄県下の博物館にも多くの課題が残されている。

沖縄県下の地域博物館の課題には、資料収集の不徹底が第一にあげられる。わたしが調査して気づいたこともあれば、学芸員の方にお話しをうかがって思いついたこともある。学芸員の方自身から収集の課題や展望を話していただいたこともある。

ここではまず、わたしの見学した沖縄県下の地域博物館に多くみられた二つの課題にふれてみたい。その課題の中において、個々の博物館における収集の課題も例として挙げながら、沖縄県下の地域博物館の資料収集活動の課題を検討したい。またそこから、全国の地域博物館の収集活動についての課題を考えていきたい。

① 急激な生活様式の変化に遅れをとっている地域資料の収集

映画やテレビで昔の映像が映し出されると、それが僅か5年前のものでも、服装や町並みに古めかしさを感じることがある。昔の映像の中に登場する人の服を、ファッションにそれほど詳しくない人でも、年代順に並べるくらいはできるかもしれない。おしゃれが好きな人ならば、服装を見るだけで流行した年代をあててしまったりすることさえできるだろう。その頃の自分の生活の様子までも、衣装とともに思い浮かべるかもしれない。家の中が映し出されれば、民具の意匠にも時代の隔たりを感じる。わたしの実家でも、以前は蚊帳を吊るしたのだけれど、その習慣は（必要も？）消えてしまって、もう蚊帳も離れの物置の奥にでもしまわれている。十五年程前に母屋が新築されてからは、食事で家族が集うのは、正座して向かい合う“卓袱台（ちゃぶだい）”から、椅子に座って位置につくテーブルにとって代わられた。

わたしたちのまわりの生活用品は、驚くほど早く変化している。それは沖縄においても全く同様である。博物館に行って民俗資料などを眺め、現在使用している生活用品と比較すれば違いが大変よくわかる。例えば、戦後の復旧期に使われたという、ジュラルミンで作られた“きゅうす”や“洗面器”など今は使われることもない。

柳宗悦はその著書において、「もし私たちが見た色々のもの（すなわち、『祖先の経験や知慧』によって育まれた『伝統の力』と、職人たちの『正しい品物を作る』という『仕事への誇り』によって作られた手仕事の品物）が、仮に日本から消え去ったとしたら、どんなに日本の姿がみすぼらしいものになるでありましょう」（カッコ内筆者補筆）と述べている[45]。こういった考えの下で柳は“民藝”という言葉を創造し、「日本民藝館」を創設した。

わたしは残念ながら柳のように審美眼を持ち合わせていないため、“正しい美しさ”を規準にして博物館が収集すべき資料を規定できない。しかし、柳の言う“正しい美しさ”という規準からは外れていたために、柳が採り上げなかった戦前の生活用品も、博物館の収集すべき資料として、今や貴重な品物となっているのではないかと思う。特に沖縄は“鉄の暴風”と表現される程、生活圏の徹底的な破壊を戦争によって被っており、戦前の沖縄の文化や生活を示す資料は貴重である。

次に、具体的な収集すべき資料の例を挙げて、沖縄県下の地域博物館における今までの収集活動の不充分な点やこれからの課題を考えていきたい。わたしが地域資料として収集すべきだと判断し

たものも挙げてみたい（この章の②において自然史分野の資料収集について述べるため、ここにおいてはその分野のものはとりあえず除いて考える）。

石垣市立八重山博物館の収蔵品に欠けているもののひとつに、「本土復帰の時のものや、730交通方法変更に関するもの」があるという。これは八重山博物館の学芸員の方が話して下さった。1972年の本土復帰の時の博物館資料が少ないというのは驚きであった。“730交通方法変更（以下、“730変更”と略す）”というのは、沖縄がアメリカの施政下にあった時には車が右側通行であったのが、日本に復帰後、本土と同じように左側通行に変更されたことをいう。その変更された時が1978年7月30日であったから“730変更”というようである。石垣市内で“730変更”の記念碑は見ることができた。しかしその変更にともなって道路標識の取り替えなどが行われたが、古い交通方法の時のものを収集しなかったのだという。

島袋正敏さんにお話しいただいた、名護博物館においての新たなる収集の目標は非常に興味深いものであった。サバニを50隻、厨子を500個、クワなどの農耕具を300個集めるという計画である（イルカ・クジラも徹底して集めたいと言っていた）。

サバニは地域・年代によって形・長さに違いがあり、決して同じものはない。サバニにエンジンが付けられる前と、付けられた後では明らかな違いが見られるという。エンジンが付けられた後、サバニは大型化された。

サバニについては、第1章の石垣市立八重山博物館の紹介の中で説明した。しかし、石垣島でサバニが現在使われているのか確認しなかった。わたしは島袋さんの勧めをうけ、名護の漁港において、現役で活躍しているサバニが他のグラスファイバー製の漁船とともに並んでいるのを見た。このサバニによる漁は、ほとんどお年寄りが行うという。もちろんサバニでの漁は廃れてきているという。

多くの博物館には、サバニのように大きな博物館資料を収集するという視点が欠けていることを島袋さんは指摘した。新しい博物館を作ったときには、サバニを30隻か40隻並べたいといっておられた。

サバニの収蔵について、博物館だけに収蔵しておくのが困難ならば、個人個人の家にインテリアとしてでもとりあえず保存しておいてもらったらどうか、というアイディアを島袋さんは持っていた。このアイディアは、小さな居酒屋において、サバニが逆さにされ、カウンターとして使われていたことをヒントにしたそうである。

農耕具についても与那国から奄美まで地域差がある道具だから、是非多く集めたいといっておられた。ひとつでは博物館資料としての価値を持たないかもしれないが、200や300個あれば博物館資料として大きな価値を生み出す。厨子についても同じことが言える、といっておられた。

沖縄を旅して、わたしのような地域に詳しくないものさえ、地域資料として地域博物館が積極的に集めたらよいと感じたものがいくつかあった。思いつくもののいくつかとして“石敢當（いしがんとう）”、“シーサー”そして“食文化”や“方言”に関する資料が挙げられる。

石敢當は沖縄を歩いているとよく見かけるもので、道教の影響を受けた魔よけの風俗である。那覇の市街地の大通りにもあった。香港や台湾でも見られるという。“魔”は直線にやってくるという考えから、道の突き当たりの家に魔が入ってこないように魔よけとして置かれる。多くはT字路における、道の交じり合うところにある。県内にも石敢當に対する信仰の地域差があるようで、本島中部の宜野湾市では至るところで見かけたが、名護市ではあまり見かけなかった。

シーサーも同じく道教の影響による風俗らしく、魔よけのために屋根に置かれている。そのため“屋根獅子”と呼ばれることもあるらしい。シーサーには装飾的な要素も込められているように感じた。シーサーは琉球大学の建物にも置かれていた。

この石敢當とシーサーは沖縄においてあまりに一般的であるためか、博物館では積極的に収集されていないようである。こういったものも地域博物館の地域資料として収集するとよいのではないか。

“食文化”と“方言”に関する資料は、博物館資料として収集が困難である点もあるが、是非収集しておきたい。

沖縄の食文化については第1章において若干言及したが、沖縄の各地にはいわゆる“郷土料理”と呼ばれるような、独特の料理が多く残っている。はじめはただ珍しさから食べていた料理に対して、島袋さんのお話を聞いたり、名護博物館の“食”やソテツ料理に関する展示を見学しているうちに、博物館資料としての価値を見い出すに至った。

“食”に関しての展示は、ナベや保存用のカメなどの道具類と、代表的な料理のレプリカからなっていた。充分な記録を取らなかったために詳しくふれることはできないが、名護の人々の伝統的な食生活の一端を示すものであった。

ソテツは飢饉食である。名護博物館では、お年寄りの指導の下でソテツ料理の加工処理を実際に行って、調査したという[46]。『ひらけ、博物館』[47]でもこのソテツ料理のことが紹介されている。お年寄りがまだソテツの料理法を知っているということは、ソテツを食さねばならなかった時代はそれ程古くないという証しであろう。その加工過程を示したもののビン詰めや、“ソテツを使った食べ物”のレプリカが展示されていた。

沖縄の食文化は非常に特徴的であり、地域博物館の資料として格好の対象であろう。しかし、名護博物館以外の地域博物館では食生活、特にその歴史についてふれられてはいなかった。沖縄の食生活に関するものはきっと興味深い資料となるであろうから、残念なことだと思った。

翻って、食文化に関する資料は本土のあらゆる地域博物館で収集されるべきものではないだろうか。外食やレトルト食品・冷凍食品が大はやりの、均一化されつつある日本の食文化。各地域の食文化が失われないうちに、調理道具や調理方法などの情報を博物館資料として、地域博物館は是非収集すべきであろう。

沖縄地方の“方言”も文化を示す大きな要素として、地域博物館の資料となるのではないか。

言語に関して系統的な研究・収集・展示活動が行われている博物館は、わたしが知っている限り

においては、国立民族学博物館とリトルワールドだけである。どちらも民族学を扱った博物館である。ことばの「内容は音の形で記号となり、音は文字の姿となって時間と空間の壁を破った」のであり、「ことばの一つ一つ」は「登録済みの文化項目」である、と国立民族学博物館は考えており、博物館資料として扱っている。言語は民族学にとって重要な研究対象であり、民族学博物館にとっては重要な博物館資料となっている[48]。

現在の標準語のもとになっている東京地方の言葉と沖縄の方言とでは大きな差異があり、興味深い資料になるのではないか。地域博物館にとっては、その地域の方言は立派な地域資料となりえる。幸いにも録音技術や映像技術が今日では発達しているので、生の声を博物館資料として保存できる。ぜひこういった資料を地域博物館は収集したい。

② 自然史分野が軽視されがちな沖縄県下の地域博物館

わたしの見学した沖縄県下の地域博物館においては、自然史分野の展示が軽視されがちであった。収蔵庫まで調査できなかったので推測の域を脱しないが、自然史分野については資料収集活動についても軽視されがちのようであった。第1章であげた博物館の中では、喜宝院蒐集館と石垣市立八重山博物館が、自然史分野の資料収集活動には積極的な働きかけがなされていなかった。

喜宝院蒐集館は私立の館で、財政的な裏付けが特にあるわけでなく、学芸活動を行うにあたっても、町並み保存の事務局を引き受けたりするなど、時間的に余裕が無いようで、自然史分野に手を広げるのは困難のようであった。

石垣市立八重山博物館でも、「いつかは自然史分野に取り組まねばならないだろうという気持ちは持っていた」(元学芸員の方のお話)ということであるが、現在も充分に取り組んでいない。八重山博物館における所蔵資料の総数は6339点であり、そのうち自然科学に関する資料はなんと27点しかない(全資料の約0.4%)。自然科学に関する資料27点のうち26点は寄贈によるものである(1989年3月末日現在)[49]。学芸員が二人おり(1992年7月現在)、一人の方の担当に自然科学の分野が含まれているが、取り組む余裕がないようである。また展示場はふさがっており自然史分野の資料を置くスペースは無い。

その地域の気候・地質・動植物の分布といった基本的な自然科学分野のデータや資料を、地域博物館は収集すべきではないか。自然のままの生態系が比較的残されている沖縄では、特にその必要性を感じる。わたしは沖縄の海の美しさを見て感動するとともに、愛知の海岸沿いも昔は綺麗だったろうにと思い寂しさを感じた。しかし沖縄の海も、リゾート開発による赤土の流出や生活排水、海水浴客のサンオイルなどによって、確実に汚染されているという。名護市の市街地に面する海も、本土復帰後急激に汚れが目立つようになったそうで、漁港には多くのゴミが打ち寄せられていた。開発が善か悪か、必要か不必要かという論は避けるが、現在の生物の生態系を示す自然史分野の資料を早急に収集しないと、資料がなくなってしまう。沖縄県下の地域博物館は、海の生態系を示すものなど、自然史分野の資料を積極的に収集すべきであろう。

まとめ

わたしが感じた博物館の面白さを第1章において紹介し、それらの博物館や他の博物館が現在以上に面白くなるための方法のひとつとして、資料収集活動の充実を第2章で訴えた。第2章では沖縄県下の地域博物館の資料収集活動が今以上に行われるべきだという課題があげられた。ただしこの課題は、戦前の沖縄には大学はもちろん高校・専門学校などの高等教育機関が全く設置されなかったという、差別的な文教政策に由来するところが大きい。しかし、いわゆる沖縄学という沖縄に関する学問の進展や、地域の文化を見直そうという動きの中で、沖縄県下の博物館における資料収集活動の進展は期待できるであろう。

ただし現在の博物館の課題は資料収集を行えば必ずしも解決できるものではない。関連分野の学問に裏付けられた目的意識をもち、資料収集を行っていかなければ課題は解決されない。さいわいにしてわが国では、文化財の保存に関しての意識が比較的高く、文化財行政もすすんでいる。しかし、資料収集がすすめられたゆえに、博物館や文化財行政の博物館資料に関する認識の甘さが露呈する場合が生じている。たとえば沖縄県下のある博物館を見学していた際に、未整理のため収蔵庫にいれてなかったのか、あるいは収蔵したくてもスペースがないのか、厨子が屋外に放置されているのを見かけることがあった。地元の博物館では、古窯から出土した土器の破片の保管に苦慮していた。道路建設や宅地開発のために、資料が博物館に大量に持ち込まれ往生することもあるという。奈良国立文化財研究所といった施設でさえ、発掘資料の置き場に困っているという[60]。

博物館では古いもの、美しいもの、珍しいものを見せればよいというわけではなく、目的意識的に特定のテーマ（学問領域、制作者など）について集められた“コレクション”を収蔵し、展示せねばならない。その時に必要となるのは、博物館関係者の収集物に対しての見識である。収集物に関しての専門的な選択作業が必要とされる。研究が進展すれば、時代が移れば、博物館資料として収集せねばならないものが増加するのは必然的である。こういった時に博物館総体としての資料収集方針の徹底ぶり、個々の学芸員の資料収集に関する力量が問われることとなる。

以上のことは研究者（専門家）と博物館との連携の問題につながる。第2章で例にあげた食生活に関する資料についても、たとえば『日本の食生活全集47　聞き書沖縄の食事』[61] などの著作をひもとくと、博物館のそれら食生活に関する資料の不足を知り、積極的な収集活動の必要性を痛感する。この場合、この本の編著者ばかりではなく、その他の食文化の研究者も多数存在すると思われ、こういう人たちと博物館関係者が連携をすれば、いいコレクションができあがるのは間違いない。事実、研究者が博物館を積極的に利用し、博物館の活動に協力をしている例もある。端的な例かもしれないが、国立民族学博物館のように研究者が中心となってできあがっている博物館もある。

個々の博物館だけでは、資料収集活動にしても、研究活動にしても自ずと限界がある。しかし博物館同志、あるいは博物館と研究者が協力すれば、もっと面白い博物館ができるのではないだろうか。博物館同志が交流をもてば、今まで気づかなかった資料の特色を見つけ出すことができるだろ

う。博物館と研究者が交流をもてば、博物館は研究者から専門的な知識や館が収集せなばならない資料を理解することができ、研究者は博物館で資料にふれることができ、自分の研究成果をひろめることもできる。

わたしは、沖縄県下の博物館や三州足助屋敷を見学し、以上のような博物館の面白さ・課題・可能性を知ることができた。

本小論を書くにあたっての調査において、多くの方々からお世話をうけた。石垣市民会館の館長を務めておられる石垣博孝さんには、沖縄県下の博物館見学のスケジュールに対する御助言をはじめ、論文作成のための資料を送付していただくなど、格別な便宜をうけた。石垣市立八重山博物館の学芸員や職員の皆さん、喜宝院蒐集館の上勢頭芳徳さん、名護市教育委員会社会教育課長の島袋正敏さん、名護博物館の学芸員や職員の皆さん、三州足助屋敷の職員・作業員の皆さんにもお世話になった。本稿ではとりたてて述べられていないが、沖縄県立博物館の當眞嗣一さんや読谷村立歴史民俗資料館館長の名嘉真宜勝さんからうかがったお話しからは、沖縄県下の博物館の現状を知るうえで多くの示唆を得た。記して謝意を表する。

（註）

1）灰谷健次郎『太陽の子』理論社、1980年。

2）伊藤寿朗『ひらけ、博物館』岩波書店、1991年。

3）宮城栄昌『琉球王国の歴史』吉川弘文館、1977年、p.261。

4）高良倉吉『琉球王国』岩波書店、1993年、p.188。

5）石垣市立八重山博物館『石垣市立八重山博物館　館報』（創刊号　1977）1977年、p.1。

6）石垣市立八重山博物館『石垣市立八重山博物館　館報』（第12号　昭和63年度）1990年、p.11。

7）「宮良当演」「宮良殿内」『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年。

8）「さばに」『大百科事典』平凡社、1985年。

9）「刳舟」前掲『沖縄大百科事典』。

10）くり舟と同様のものをさす丸木舟に関する著作に『最後の丸木舟――海の文化史――』（鳥越皓之：本文、樋口健二：写真、御茶の水書房、1981年）があるが、この本では複数の木によって「あわせ木」されてつくられた舟も丸木舟と称されている。

11）前掲『石垣市立八重山博物館　館報』（第12号　昭和63年度）。

12）名嘉真宜勝「石川市伊波焼墓調査報告」『読谷村立歴史民俗資料館紀要　第16号』1992年、p.64。

13）「土葬」前掲『沖縄大百科事典』。

14）「風葬」前掲『沖縄大百科事典』。

15）沖縄の葬制のことについては、『沖縄の祭祀と信仰』（平敷令治、第一書房、1990年）に詳しい。

16) 上勢頭芳徳「長寿の島における高齢者の暮らしと活動」『月刊社会教育』(1992年10月号) 国土社、p.51。

17) 同上、p.53。

18) 同上、p.52。及び、上勢頭芳徳「赤瓦とサンゴ礁の石垣——沖縄・竹富島の町並み保存憲章と条例づくり」『地方自治通信』(No.200) 地方自治センター、1986年。

19) 柳宗悦「琉球の富」『民藝四十年』岩波書店、1984年。ただし「琉球の富」の初出は『工藝』(第百号、1939年10月) である。

20) 野外民族博物館　リトルワールド『リトルワールドガイド』発行年未記載、筆者1992年8月入手、p.16。

21) 上勢頭亨『竹富島誌』法政大学出版会。なお『民話・民俗篇』(1976年) と『歌謡・芸能篇』(1979年) の2巻からなる。

22) 上勢頭芳徳「最南端の資料館　竹富島　喜宝院蒐集館」『文明のクロスロード　Museum Kyusyu　第19号』博物館等建設推進九州会議、1986年、p.57。

23)「喜宝院」前掲『沖縄大百科事典』。

24) 前掲「最南端の資料館　竹富島　喜宝院蒐集館」。

25)『オリオンビール概要』オリオンビール株式会社、1992年4月1日付け。

26)『Orion工場ご案内』(パンフレット) オリオンビール株式会社、筆者1992年7月入手。

27) 島袋正敏『沖縄の豚と山羊——生活の中から——』ひるぎ社、1989年。

28) 名護博物館『プーミチャーウガーミ　屋部のウシヤキ』1989年。

29) 名護博物館『ぶりでぃ　名護博物館1984』1984年。

30) 前掲『ひらけ、博物館』pp.30〜31。

31) 名護博物館『なご　NAGO MUSEUM』(パンフレット) 筆者1992年7月入手。

32)「砂糖」前掲『沖縄大百科事典』。

33)「サトウキビ・モノカルチャー」前掲『沖縄大百科事典』。

34) 足助観光協会『足助ＷＡＬＫ』(観光パンフレット) 筆者1992年5月入手。

35)「あすけ　足助［町］」『世界大百科事典』平凡社、1981年。

36) たとえば、前掲『足助ＷＡＬＫ』。

37) 足助町緑の村協会『したたかな山の暮らしに学ぶ　三州足助屋敷の10年』1990年、p.8。以下『三州足助屋敷の10年』と略す。

38) 前掲『三州足助屋敷の10年』p.8。

39) 同上、p.9。

40) 同上、p.9。

41) 同上、p.47。

42) 同上、p. 79。1990年3月16日付け朝日新聞の記事。

43）同上、p.16。

44）同上、p.21。

45）柳宗悦『手仕事の日本』岩波書店、1985年、p.223。なお『手仕事の日本』は靖文社より1948年に刊行された。

46）前掲『ぶりでぃ　名護博物館1984』（pp.21～22）にその時の写真がある。

47）前掲『ひらけ、博物館』。

48）国立民族学博物館『国立民族学博物館』（パンフレット）筆者1991年8月入手。

49）前掲『石垣市立八重山博物館　館報、第12号　昭和63年度』p.26。

50）1992年11月23日付け中日新聞。

51）「日本の食生活全集　沖縄」編集委員会『日本の食生活全集47　聞き書沖縄の食事』農山漁村文化協会、1988年。他の46都道府県についても同様の本が出版されている。